

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第190次)

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)では、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、近年、大極殿院や朝堂院で継続的に発掘調査をしています。今回は、大極殿院東門と東面回廊を調査しました。その結果、東門の規模を確定し、東面回廊の構造がより一層あきらかになる等、多くの成果を得ることができました。ここでは、その一部を紹介します。なお、調査期間は2016年10月4日から2017年2月6日までで、調査面積は480㎡です。

これまでの調査で、大極殿院回廊は礎石建ちの複廊形式であり、瓦葺きであったことがわかっています。また、東西南北に4つの門をもつと考えられており、いずれも桁行7間、梁行2間と推測されています。ただし、南門のみ柱間寸法が約5.1m(17尺)と大きく、ほかの3つの門は桁行が約4.2m(14尺)、梁行が約3.3~3.6m(11~12尺)と推定されています。しかし、東門の南端は未調査であり、東門の規模、東門と東面回廊との取り付け部の構造等については不明であり、大きな課題でした。



大極殿院上空から畝傍山を望む(北東から)

今回の調査で、東門の南端にあたる3基の柱の位置を確認できました。その結果、東門の規模は桁行7間、梁行2間で、柱間寸法は桁行約4.2m(14尺)、梁行約3.3m(11尺)と判明しました。東面回廊では、従来の所見どおり、桁行約4.2m(14尺)等間、梁行約3.0m(10尺)等間の位置で、礎石据付穴や根石を検出できました。しかし、東門と東面回廊との取り付け部は、われわれに大きな問題を投げかけてきました。取り付け部の2間分だけは桁行の柱間がほかもより短く、さらに棟通りの礎石据付穴1基には小石を充填していました。ほかとは様相が異なるものだったのです。取り付け部の構造は未解決ですが、重要な発見であることは間違いありません。

また、回廊の礎石や基壇外装はすべて抜き取られていましたが、内庭側の基壇外装の据付溝を検出できたことは貴重な成果といえます。藤原宮大極殿院・朝堂院の回廊では、これまでに基壇外装据付溝が残っていたことはほとんどありません。今回、この基壇外装据付溝が良好な状態で確認できたことで、より精確に回廊の幅等の規模を検討できるようになったのです。

大極殿院回廊の発掘調査は、東南部分がほぼすべて終了しました。しかし、北東部分には未調査部分が多く残っています。大極殿院回廊の全貌解明に必要な最後の欠片は、ここに眠っているはずです。

1月28日(土)の現地説明会には、季節外れの小春日和のなか、497名の方々にご参加いただきました。熱心にご覧いただき、多くのご質問やご意見をお寄せいただきました。これからも多くの方々の熱意に支えられながら、皆様とともに古代へのロマンあふれる旅路を歩みたいと思います。

(都城発掘調査部 和田 一之輔)



現地説明会の風景(北西から)